１１回にわたる川崎病全国調査成績

柳川洋、中村好一、屋代真弓、藤田委由、永井正規
川崎富作*、大川澄男**

要約：厚生省川崎病研究班は、１９７０年以来ほぼ２年に１回の間隔で１９９０年末までに、１１回にわたって全国の医療機関を受診した川崎病患者を対象に疫学調査を実施し、過去２７年間に１０５，６２７名（男６１，２１１人、女４４，４１６人、男女比１．４）の患者が報告された。今回１９８９年１月～１９９０年１２月末までの２年間における第１１回全国調査の解析が終了したので、これまでの成績とあわせて川崎病疫学像の概要を報告する。

見出し語：川崎病、全国調査、疫学、流行

【方法】

第１１回全国調査の対象施設は、全国の医療施設のうち小児科を併設する１００床以上の病院および小児科のみを標榜する１００床未満の専門病院とし、調査時における最新の病院要覧（厚生省編、医学書院発行）を用いて該当施設を選定した。

【調査結果】

１．年次推移

これまでに実施された１１回の調査で報告された患者総数は１０５，６２７人である。年次推移をみると、表１に示すように男女とも１９７０年ごろから患者数は着実な増加傾向を示している。とくに１９７９年には前年の２．０倍、１９８２年には２．４倍、１９８６年には１．７倍の患者が発生し、疫学的に明らかな流行の様相を示した。今回の調査対象になった１９８９年、１９９０年はともに患者数は約５，５００人で、とくに流行はみられなかった。

死亡患者は、合計で３８３人報告され、致命率は０．４％である。１９７４年ごろまでの致命率は１％以上の高率を示していたが、１９７５年以後低下傾向が持続し、１９８０年以後は０．３％以下の低率になっている。

２．性比

今回報告された２年間の報告患者総数を性別にみると男６，５１９人、女４，７７８人で、性比

自治医科大学公衆衛生学教室　(Department of Public Health, Jichi Medical School)
* 川崎病研究情報センター　(Kawasaki Disease Research Information Center)
** 日赤医療センター小児科　(Department of Pediatrics, Japan Red Cross Medical Center)

は１．４で男が多かった。性比は毎年ほぼ一定の値を維持しているが、流行年の性比はやや縮小する傾向がみられる。（例：１９８２年、１９８６年は１．３である。）

表１　性別患者数、罹患率、死亡数、致命率の年次推移
（第１回～第１１回全国調査）

年次	患者数			0～4歳10万対罹患率			死亡数（致命率%）
	計	男	女	計	男	女	
～1964	88	58	30	1.1	1.4	0.8	－
1965	61	33	28	0.7	0.8	0.7	－
1966	79	49	30	1.0	1.2	0.9	－
1967	101	60	41	1.2	1.4	1.0	2(2.0)
1968	310	177	133	3.7	4.1	3.2	6(1.9)
1969	461	281	180	5.3	6.3	4.3	9(2.0)
1970	887	527	360	10.1	11.8	8.4	10(1.1)
1971	804	481	323	8.6	10.1	7.1	12(1.5)
1972	1,135	658	477	11.9	13.4	10.3	16(1.4)
1973	1,524	928	596	15.4	18.3	12.4	35(2.3)
1974	1,963	1,157	806	19.6	22.4	16.6	20(1.0)
1975	2,216	1,332	884	22.2	26.1	18.1	16(0.7)
1976	2,337	1,406	931	23.7	27.9	19.4	16(0.7)
1977	2,798	1,706	1,092	29.1	34.6	23.4	18(0.6)
1978	3,459	2,064	1,395	37.4	43.5	31.0	14(0.4)
1979	6,867	3,987	2,880	77.5	87.5	66.8	38(0.6)
1980	3,932	2,317	1,615	45.9	53.0	38.6	8(0.2)
1981	6,383	3,677	2,706	77.8	87.3	67.7	16(0.3)
1982	15,519	8,762	6,757	194.7	214.2	174.1	49(0.3)
1983	5,961	3,441	2,520	77.3	86.9	67.1	17(0.3)
1984	6,514	3,790	2,724	85.4	96.8	73.3	19(0.3)
1985	7,611	4,430	3,181	102.0	116.0	87.4	10(0.1)
1986	12,847	7,249	5,598	172.2	189.8	153.8	18(0.1)
1987	5,256	3,066	2,190	73.4	83.5	62.7	10(0.2)
1988	5,217	3,056	2,161	74.9	85.5	63.7	4(0.1)
1989	5,599	3,256	2,343	83.1	94.2	71.5	8(0.1)
1990	5,698	3,263	2,435	87.2	97.2	76.5	12(0.2)
計	105,627	61,211	44,416	-	-	-	383(0.4)

３．月別患者数

過去１３年間（１９７８-１９９０年）について月別患者報数をみると、図１に示すように１９７９年３－５月、１９８１年１２月－１９８２年６月、１９８５年１２月－１９８６年５月に患者数の大幅な増加がみられ、疫学的に流行と判断された。そのほかに１９８１年５－７月、１９８４年３－６月にも小さな山がみられた。

４．性別年齢別罹患率

図２は１９８９、１９９０年の性別年齢別罹患率（両年とも人口は１９８９年の推計人口を用いた）を示す。罹患率は１９８９年では６－８カ月１９９０年では、男は６－８カ月にピーク、女は３－５カ月にピークがあった。両年とも一峰性のカーブを示し、４歳未満の患者は全体の８０．４％を占めていた。とくに１９８９年では０歳後半から１歳前半にかけて男女差が開いていた。

５．都道府県別罹患率

今回報告された２年間の患者報告数が最も多いのは、東京、次いで神奈川、大阪、埼玉の順であった。０－４歳人口１０万対罹患率を都道府県別にみると、１９８９年は和歌山が最も高く、次いで福井、岐阜、石川の順であった。１９９０年は滋賀、宮城、石川、香川などが高かった。２年間を通して明らかな地域差はみられなかった。

６．治療状況と同胞例、再発例、死亡例、心後遺症例の出現状況

治療薬剤の使用状況は、図３に示すようにステロイド治療を受けたものの割合は年々低下し、１９９０年には１．２％まで低下した。アスピリン治療、抗生物質の投与を受けたものは各年ともほぼ一定であった。γ－グロブリンの治療を受けたものは、年次とともに急速な上昇傾向を示し、１９９０年には６９．３％まで増加した。今回報告された２年平均で同胞例ありのものは、全報告例の１．２％を占めていた。また、再発例は３．５％、死亡例は０．１８％、心後遺症例は１３．１％の患者にみられた。１９８２年以来の年次推移をみたものが図４である。同胞例、再発例、心後遺症例の出現頻度には、年次による著しい変化はみられなかった。死亡例の割合は、１９８５年以来、０．１－０．２％の範囲である。

図１　年次別月別川崎病患者報告数

（第５回～第１１回全国調査）

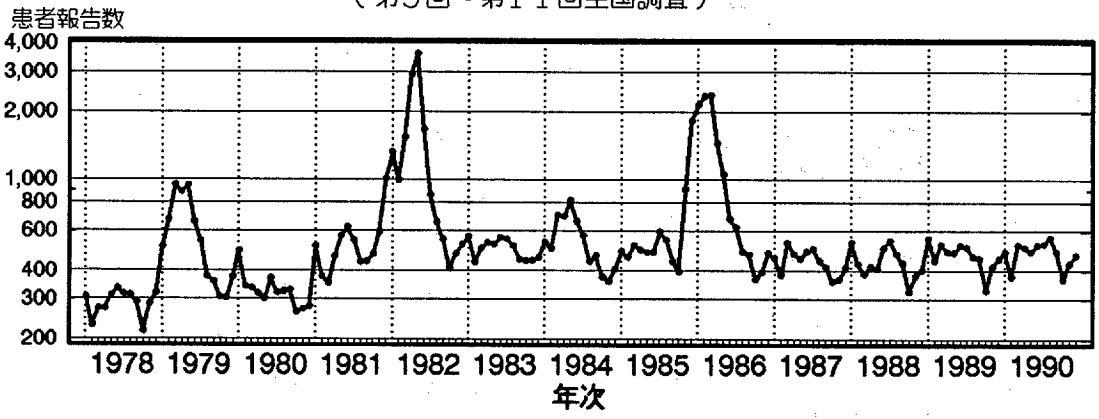
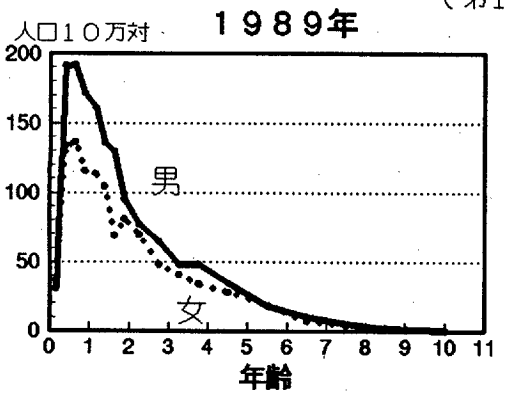


図２　性別、年齢別罹患率

（第１１回全国調査）



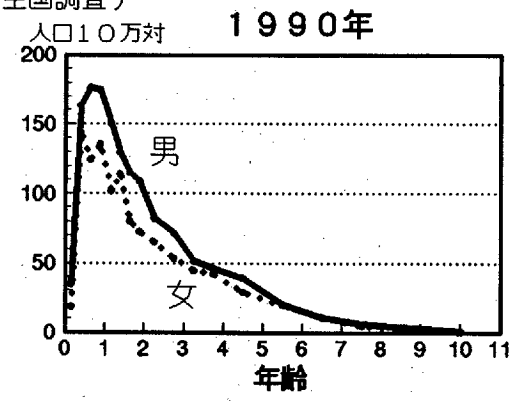


図３　薬剤の使用状況

（第８回～第１１回全国調査）

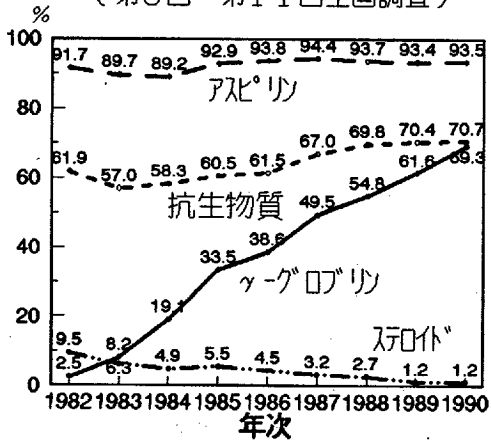
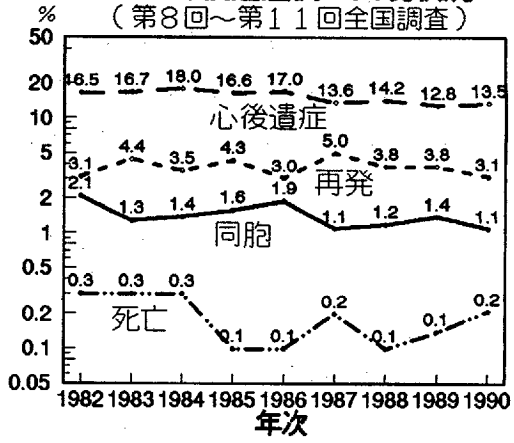


図４　同胞例、再発例、死亡例 心後遺症例の出現状況

（第８回～第１１回全国調査）



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:厚生省川崎病研究班は、1970 年以来ほぼ 2 年に 1 回の間隔で 1990 年末までに、11 回にわたって全国の医療機関を受診した川崎病患者を対象に疫学調査を実施し、過去 27 年間に 105,627 名(男 61,211 人、女 44,416 人、男女比 1.4)の患者が報告された。今回 1989 年 1 月～1990 年 12 月末までの 2 年間における第 11 回全国調査の解析が終了したので、これまでの成績とあわせて川崎病疫学像の概要を報告する。